

## 巻 頭 言

学校長 石 田 弓

本年度の『中等教育研究紀要』が刊行されました。今回で第70号となります。前身である『中等教育の実際』が創刊された1932年（昭和7年）から数えると、本誌は90年以上の歴史を有する研究論文集となります。中等教育に関わる教育実践研究の成果をこれほど長く公表し続けてきた紀要は、数少ないものと思われまふ。わが国の中等教育の発展に寄与することを大学附属の中・高等学校の使命と考え、本校教員の教育実践研究の成果を掲載してきました。全国の教育関係者と切磋琢磨するための媒体として、これまでに本誌が果たしてきた役割は大きいと言えそうです。

さて、本校は2003年度（平成15年度）に、文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、20年間にわたって科学技術人材の育成に携わってきました。特に2018年度（平成30年度）から5年間の第Ⅳ期では、すべての生徒が課題研究に取り組み、すべての教員がその研究指導に携わる体制を構築しました。そして、本年度より3年間は、新たに「先導的改訂型第Ⅰ期」の指定を受け、21年目のチャレンジを始めたところです。第Ⅳ期までの成果をさらに発展させ、イノベーションの創出を担う科学技術を先導する人材の育成を目指しています。また、コロナ禍では中止されていた海外連携校との相互訪問も再開され、国際的に通じる科学教育カリキュラムの開発を進めています。

しかしながら、すべての生徒が課題研究に取り組むこととなれば、当然、教員自身も高い研究力と研究指導力を有している必要があります。授業を中心とした日々の教育活動や生徒指導、進路指導、また教育実習指導などでも多忙を極める本校教員が、自身の研究力や研究指導力を高めていくのは、決して容易なことではなく、想像以上に大変なエネルギーを費やしているものと思われまふ。しかしながら、こうした教育実践研究への取組は、個々の教員にとって刺激的なチャレンジにもなっているのでしょうか。そして、そうしたひたむきな先生方の姿を見て、本校生徒たちもがんばる動機づけを高めているに違いありません。

そして、教育実践研究にかかる一大イベントである教育研究大会が、昨年11月25日に開催されました。「カリキュラム・マネジメントを志向した学びの価値の創造（1）— STEAM教育の考えを生かして —」を研究主題としました。昨年度と同様、全国から参加者を受け入れ、本校教員による授業公開と研究協議、および講演会を企画しました。300名を超える方々にご参加いただき、熱心かつ有意義な討議が行われました。こうした機会でも、自身の教育実践を同じ教育関係者に示すのは、なかなか勇気の要ることのように思えます。しかしながら、授業を行う先生方の姿には、どこか余裕があり、授業公開を楽しんでいるようにも感じられ、改めて敬意の気持ちを抱きました。本校には、生徒にも教員にも常に発展と深化を目指す雰囲気があふれています。もちろん、1つの発展があれば、次なる課題もまた見えてくるため、終わりのない取組になるのですが、本校教員はこれから10年先、30年先の日本の社会の発展に貢献すべく教育内容や教育方法にかかる新たな知見を見だし、提案していく責務を自覚しておられるものと思ひまふ。

本年度は、新型コロナウイルス感染防止の対策が大幅に緩和された年であり、本校の生徒も教職員も従来の学校生活を取り戻しつつあります。そうした中で、熱心な教育実践研究を行ってきた成果についてご高覧いただき、忌憚のないご意見を賜りますれば幸いです。

最後に、本誌の刊行にご尽力くださった関係の教員の皆様にご心より感謝申し上げます。また、日々の学校業務で大変お忙しい中でも、8編の研究論文を執筆・投稿して下さった先生方にご心より御礼申し上げます。本紀要が、わが国の中等教育の発展に大きく貢献することを願っております。